

笑顔の ひろば

vol. 43

2019年 新年号

川崎協同病院
広報誌



<http://www.kawasaki-kyodo.jp>

研修医、ただいま奮闘中！ 4人に聞く

戸惑い、悩み、感謝しながら日々たくましく

川崎協同病院は、基幹型臨床研修病院として、毎年新卒医師を受け入れ2年間の研修を行っています。現在、7人が毎日さまざまな部門で日夜研修に励んでいます。このうち1年目の初期研修の終了を控えた4人に、現場での苦労や目指す医師像などを聞きました。

自分は研修医でも患者さんにとっては医師

初期研修が始まって一年が経とうとしています。
この一年で苦労したことはありますか。

津田 誠（つだ まこと） 出身：東京都、北里大学卒

とにかく何もかもが大変でした。まだまだ自分自身学ばなければならぬことが多い中で、医師と言う仕事柄、患者さんの命と人生に責任を持たなければならず、最善を常に求められる環境は精神的にもハードでした。自分は「研修医」という立場だとはいえ、患者さんにとっては「一医師」です。



津田誠医師

自分が診る患者さんに対して、その期待に応える努力を怠らないという、当たり前のことがとても大切だと痛感しました。

失敗したこともいろいろあります。特に、学生時代とは違って、自分が決めた処方や診療で患者さんの病状が変わってきてしまうことが数多くあり、最善を尽くし続けていく難しさを感じます。さらに、患者さんとの信頼関係も上手く築けないことは多々ありました。この関係は、ちょっとしたきっかけですぐに損なわれてしまいます。そういったことのないように、努力は常に怠らないように意識しています。

高井 凜（たかい いさむ） 出身：石川県、富山大学卒

私は車椅子をつかっているのですが、やはりこのことによる障害はあったと思います。もちろん、指導医含め病院スタッフのみなさんは本当によくしてくださり、私が研修をすることのできる環境を整えてくださっていますが、日々の業務の中で一歩出遅れてしまうことや周りの研修医と比べて、できること、できないことについて明確な差異があることで悩むこともあります。それでも、自分ができることを一つずつ明確にすることで医師として日々成長していることを実感でき、本当に感謝しています。

土金 清香（つちかね さやか） 出身：兵庫県、滋賀医科大学

とにかく勉強不足を痛感させられた1年でした。実臨床の場において、これまで座学で学んできたことが自分の中でしっかりと理解し切れていなかった面や、うろ覚えになっていたことが多く、国家試験に合格したとはいえ、表面的な理解に留まっているものが多くあることがわかりました。

医学部での勉強では、典型的なこの症状にはこの診断というのがわかりやすくありました。しかし実臨床ではそれは通じません。救急外来で患者さんを診ていた時に、高齢の方が「動けない・食欲がない」といった訴えで来られました。今であれば感染症を第一に疑うところですが、初めの頃は真っ先に「脳梗塞かな」と思いました。今思えば少しずれた推論をしてしまったこともあります。

熊谷 栄太（くまがい えいた） 出身：神奈川県 横浜市立大学卒

研修医として知らない事が多くあるということを除けば、この1年弱の研修の中で特筆して辛かった、大変だったということはありません。もちろん細かい所で言えばいろいろあります。環境の変化や医師として働くうえでの患者さんとの関係性をどう築くかという悩みや、患者さんの命に責任を持つ重圧などです。それでも病院のスタッフの方々常に気にかけて下さるので、本当に困ったということはないと思います。



2年目の飯高医師と一緒に

みなさん、それなりの苦勞をされているようですが、反対にこの病院で研修を始めてよかったと思える点はどんなところでしょうか。

いつでもなんでも相談できる環境のなかで

津田 沢山あります。この川崎協同病院での研修では、社会的に困難を抱えた方、複雑な環境におかれた方々と向き合うことも少なくありません。その方々の立場を理解した上での最適な医療の選択がどれだけ難しいかを日々実感しながらの研修は、とても貴重な経験をしていると感じています。

土金 病棟にしろ救急外来にしろ、先輩医師が私達研修医にさまざまな経験をさせてくださいます。それに加えて研修医の意見であってもしっかりと聞いてくれ、自らの力で判断する訓練を日常的に積むことができます。どの科の医師も距離が近く、上下関係も風通しが良いため何時でも相談しやすい雰囲気があることが魅力だと思います。



土金清香医師

熊谷 指導医の先生や看護師さんはじめさまざまなスタッフが、仕事でもプライベートでも気にかけて下さるので、つまづくことなくここまで研修を続けてこられました。また、研修修了時にはこうなっていたい、と思える医師が多くいることが魅力だと思います。



熊谷栄太医師

あと1年の研修を経て、将来どんな医師を目指しますか？

患者さんの痛みや苦しみを共感できる医師に

津田 今はまだ研修医という立場で、知識も技術も足りていないところが多くあります。しかし、この川崎協同病院には、多くの教育熱心な医師がいて、日々惜しみなく指導をしてくださいます。握るとホッとする、温かい手をどんなときにも差し伸べられるような医師になりたいと思っています。

高井 自身に障害があることで、患者さんにより近い視点に立って医療ができることを強みとして、患者さんの痛みや苦しみに寄り添い、悩みや苦しみに共感しながら少しでも患者さんが元気に日常に戻って行けるよう、歩み続けられる医師になっていきたいと考えています。



高井凜医師

熊谷 私は将来病理科の医師として働いていきたいと考えています。そうすると、将来は、患者さんと触れ合う機会がとても少なくなってしまいます。この川崎協同病院で研修して得た、患者さんの心情や環境面にまで目を向ける視点を大切にしていきたいと思っています。あと1年しか研修期間が残っていませんが、できるだけ広い視野でものごとをみて、研修に取り組んで行きたいと思っています。

土金 もうすぐ2年目の研修医となり、4月には後輩も入ってきます。まだまだ勉強不足な面もあるため、座学・臨床両面での勉強を進め、後輩にも指導ができる医師として成長して行きたいと思っています。

患者さん一人ひとりについて、病気だけでなく背景までしっかりと理解し、医師と患者のよい関係を築けるようになりたいです。その上で「あの先生にだったら何でも話せる」と言ってもらえるような医師へと成長できるように日々学び続けていきたいです。

医師臨床研修制度

日本では、医師法により「診療に従事しようとする医師は、2年以上、医学を履修する過程を置く大学に付属する病院又は厚生労働大臣の指定する病院において研修を受けなければならない」と規定されている。

臨床に従事する医師は、卒後2年間の臨床研修が義務付けられていて、この研修を受けずに診療に臨むことは、医師法の規定に違反することになる。また、臨床研修を修了していなければ病院又は診療所の管理者となることができない。

6年間の医学教育を修了した後、医師国家試験を受験。これに合格した者だけが、臨床研修に進むことができ、2年かけて各科をまわり（スーパーローテーション方式）医師としての基本的な臨床能力の獲得に向け研修をする。

川崎協同病院は、厚生労働省の指定する臨床研修基幹病院として、1学年に付き4人まで研修医を受入れ、医師としての人格を涵養し、基礎的な臨床能力が獲得できるよう指導をしている。



お互いの腕を使って採血練習

私が担当します！

患者・家族と医療機関の間に立って

昨年12月から看護師長として地域連携室で勤務しています。これまでは川崎協同病院の急性期病棟で2年半看護師長として、手術や心臓の検査・治療、緊急入院の必要な患者の入院対応のためベッド調整など病棟運営をおこなってきました。

地域連携室では、地域に求められる病院として、入院から退院まで安全安心な医療・看護・介護・リハビリテーションが提供できるよう医師・看護師・ソーシャルワーカー・リハスタッフなど他職種と連携しながら日々奮闘しています。私が着任した昨年12月から看護体制は2人に増員され、さらにスムーズな入院の受け入れと細やかな退院支援ができるよう取り組んでいます。

私は地域連携室の看護師として、おもに退院支援を行っています。病棟看護師と協力し、入院から早期に退院支援が必要な患者を把握し、患者・家族と面談を行い、チームでカンファレンスを実施して、患者が安心して生活の場に帰れるよう支援しています。これまでとは違う業

地域連携室 看護師長
うめだ あさみ
梅田 麻美



2000年川崎協同病院入職。2005年協同ふじさきクリニックに異動、2014年川崎協同病院に戻り、障害者病棟・急性期病棟の師長を5年半経験、2018年12月から地域連携室師長。

務内容で自分の知識や経験不足を実感し反省する毎日ですが、患者さんやご家族と面談し直接関われることはとても楽しく、他事業所の医師・看護師・ケアマネジャーと話すことは緊張とともに新しい発見があります。

まだ異動したばかりで、地域連携室の看護の役割は模索中ですが、一番患者のそばにいる看護師が、患者・家族と医療・介護関係機関との橋渡しをするという重要な役割を担うのではないかと思います。そのために地域に出向き、「顔の見える連携」を心がけ、地域で頼りにされる病院を目指して行きます。

桜本商店街「日本のまつり」に参加 地域の病院という役割を実感

川崎協同病院のすぐ隣にある桜本商店街が中心となって行われる毎年恒例の「日本のまつり」が、昨年も11月18日に開かれました。このまつりは、地域の人々がふれあうことを目的とし出店やイベントでにぎわいます。

今回も、近隣の町会によるさまざまな屋台が出たり、フリーマーケット・ブンムルノリ（韓国、朝鮮の伝統農楽）が開かれたりしました。また、おみこし・ミニ動物園・和太鼓演奏など、特設舞台では数々のイベントが行われました。



若い力で頑張りました！



美味しいお餅ができますように

当院も、地域の“一員”としてまつりの実行委員となり参加、医療班、会場の警備、さらにごみ拾いを担当しました。また、恒例の「健康チェック・相談コーナー」と「餅つき」を出店しました。

各職場から若手職員計20人ほどが参加した餅つきは大人気で、つきたての餅にあんこ、きな粉、黒ゴマをつけた3種を販売したところ、昼過ぎには完売しました。当院に入院中の患者さんで、リハ職員と一緒に餅つきに参加し、まつりを楽しむ姿も見られました。また、通行中の親子連れが、おもしろそうだばかりに立ち寄り、餅をつく子供の姿を笑顔で写真におさめていました。

職員にとっては、出店することで地域を身近に感じることができるとなったほか、会場の警備やごみ拾いといった主催者の役割を担うことで、当院が地域の病院であることを実感できる教育の場にもなったようです。

若い職員には慣れない餅つきでしたが、「また来年もがんばろう！」と意欲を燃やしていました。

事務長 佐藤 秀樹



病院は地域との連携が何より大切。近隣の医療、福祉関係の施設や機関を訪問し、紹介していきます。

第18回は「障がい児リハビリセンター大島」です。

(取材：地域連携室 高橋靖明・梅田麻美)

「楽しいから行きたい」場を目指して

「障がい児リハビリセンター大島（以下リハビリセンター大島）」は、重症心身障がい児（重心児）が、放課後などに通うことができる、「放課後等デイサービス事業（略称放デイ）」を行っています。

川崎駅からバスで15分ほどのバス通りから一本入った川崎区の住宅街の一角にあります。内装は木目が目立つアジアテイストのつくりで、落ち着いた雰囲気。室内は、季節に応じて飾りがされたり、カラフルな色使いのおもちゃや絵本などがおかれたりと、楽しい空間をつくりだす工夫がされています。

重心児対象の放デイは地域でも珍しく、リハビリテーションに重点を置いている点も特徴的です。

利用定員は5人。現在の1日の平均利用は約3.7人で、小学1年から高校1年生までが利用しています。近隣の田島支援学校・城南支援学校を中心に、送迎もあります。

受け入れる子どもたちは、医療ケアが必要な子ども対象ですが、現在は比較的医療ケアがあまり必要でない活動性の高い子どもの利用が多くなっています。

ここで働いているのは、児童発達支援管理責任者、児童指導員、看護職員、機能訓練担当職員（リハスタッフ）たちで、各職種が連携しながらそれぞれの専門性を活かした支援を行っています。運営時間は、放課後から午後5時までです。

利用者は、まずバイタルチェックを受け、その後、個々に合わせたプログラムが行われます。シートブランコやボールプールなど全身で感覚を感じる遊びを取り入れて



明るく親しみやすい職員さん

放課後等デイサービスとは

学校教育法に規定する学校（幼稚園、大学を除く）に就学している障害のある児童を対象とする福祉サービス。内容は、学校授業終了後や休業日に生活能力の向上のために必要な訓練、社会との交流の促進など多様なメニューを設け、本人の希望を踏まえたサービスを提供すること。具体的には、「自立した日常生活を営むために必要な訓練」「創作的活動、作業活動」「地域交流の機会の提供」「余暇の提供」など

重症児を対象にした数少ないサービス 障がい児リハビリセンター大島



アジアテイストのおしゃれな外観



子どもたちと一緒に作った
正月飾り

います。フロア全体にボールをばらまいて行うボールプールが子どもたちに大人気です。また、季節の飾りを一緒に作ることもあります。

リハビリテーションは、個別に行うのではなくペットボトルボウリングなどの遊びをしたり、プログラム作業の中にリハの視点を取り入れたりするメニューを組み、楽しみながら行うことで継続できるよう工夫されています。

こうした活動を通して、どんな子どもたちにもあるプラスの小さな変化を見つけ、その点を少しでも伸ばし、みんな喜びを共有しています。

今後は、音楽療法士の資格を持つスタッフを中心に音楽を取り入れたプログラムや様々な分野のゲストを招いてイベントなども検討中です。

重心児を対象とした放デイはまだ少なく、障がいを抱った子どもが安心して暮らせるために重心児対象の放デイが地域の中で増えていけるよう、そのさきがけとなれるような取り組みをしていきたいと管理者の大川常夫氏は言います。そのために、地域の学校を気軽に訪ね、連携を深め、また、気軽に相談や見学ができるような事業所づくりを心掛けているそうです。

●川崎協同病院へひとこと・・・

同じような利用者を一緒にケアしているので今後もカンファレンスなどで情報を共有し、連携していけたらいいと思います。

●おじゃまして・・・

地域でその人がその人らしく生活できるように、スタッフみんなが、何ができるかということを考えている姿勢が印象的でした。

株式会社 AT

重症心身障がい児放課後等デイサービス
障がい児リハビリセンター大島

管理者 大川 常夫 氏

川崎市川崎区大島5-15-5

★お知らせ：12月から川崎協同病院の地域連携室師長が梅田麻美にかわりました。今号より高橋と梅田が「おじゃまして」を担当します。

